

放出動詞の移動動詞用法について

磯野 達也

了徳寺大学・教養教育センター

要旨

ある音の放出を表す音放出動詞は、方向を表す前置詞句とともに用いられると(i)のように移動動詞として解釈されるが、音を発するという点では同じに見える動物音声動詞や発話様態動詞は移動動詞としての解釈をもたない。

(i) The cart rumbled down the street.

(カートがゴロゴロと音を立てながら通りを動いていった.)

(ii) *The duck quacked down the path.

(アヒルがガアガアいいながら小道を進んでいった.)

(iii) *He yelled down the street.

(彼は叫び声を上げながら通りを進んでいった.)

本稿では、音放出動詞が移動動詞として容認され、(ii)、(iii)にあるような動詞が移動動詞として容認されない理由を、生成語彙論で提案されている特質構造を検討することで明らかにする。そして、音を放出する物体と放出される音の存在を表す音放出動詞の特質構造の特性と本稿で「事象の特定性制約」と呼ぶ、「意味表示で表される活動は、特定の事柄のみに関与できる」という一般的な原理である「行為の連鎖」に基づいた制約でこの動詞クラスの移動動詞としての解釈が許されることを示す。

キーワード：放出動詞，移動動詞，特質構造，語彙表示，生成語彙論

Verbs of Emission as Motion Verbs

Tatsuya Isono

Center of Liberal Arts Education, Ryotokuji University

Abstract

In this article we deal with verbs of emission in the motion-verb use and argue that their motion-verb interpretation derives from the interaction between the qualia structure specific to the emission verbs and the semantic restriction concerning to the notion of “action chain”. Verbs of sound emission, which express the emission of a certain sound, function as motion verbs when they co-occur with directional PPs, as is shown in (i). On the contrary, verbs of sounds made by animals and verbs of manners of speaking as seen in (ii) and (iii), which are also related to sound, do not work as motion verbs even if they co-occur with directional PPs.

(i) The cart rumbled down the street.

(ii) *The duck quacked down the path.

(iii) *He yelled down the street.

We explain the difference in acceptability of (i)-(iii), in terms of qualia structure and the semantic restriction. Qualia structure plays an important role in the theory of “generative lexicon”; the semantic restriction that an activity represented in the semantic representation of verbs can be related to only one specific event is a natural consequence of the notion of the action chain. The qualia structures of the verbs in (ii) and (iii) contain an activity subevent. This type of activity subevent cannot combine with PP’ s subevent representing movement, since activities represented by the activity subevent are for quacking or yelling. Thus, these verbs are not interpreted as motion verbs. On the other hand, in the qualia structure of emission verbs an activity subevent, which is related to emitting sound, is not activated, since only entities that do not do any activities of themselves are selected as sound emitters for these verbs. Therefore, qualia structures of emission verbs and of PPs combine with each other, which yields a semantic representation for motion verbs.

Keywords: verbs of emission, motion verbs, qualia structure, semantic representation, Generative Lexicon

I. はじめに

(1)にある音の放出を表す音放出動詞は、方向を表す前置詞句とともに用いられると(2)のように移動動詞として解釈される ((1)及び(2a)はLevin (1993)¹⁾より, (2b)はBritish National Corpus²⁾より引用).

(1) a. The bell buzzed.

b. The door squeaked.

(2) a. The cart rumbled down the street.

b. THOUSANDS of islanders fled in terror yesterday as 20ft walls of boiling mud and ash roared down the slopes of Mount Pinatubo in the Philippines.

これは、同じく音の発生を表す動物音声動詞(verbs of sounds made by animals)や発話様態動詞(verbs of manner of speaking)が移動動詞としての解釈をもたないことと対照的である ((3)はLevin (1993)より引用).

(3) a. 動物音声動詞

*The duck quacked down the path.

b. 発話様態動詞

*He yelled down the street.

Levin and Rappaport Hovav (1995)³⁾は、音放出動詞が移動動詞として用いられるのは、表される音が移動に必然的な場合であると説明している。しかし、これに対しては影山(2006:64)⁴⁾が(4)の反例を示している。この例では、jangleによって表される音は、移動に必然的なものではなく、「密接に関係する」音である。

(4) A man and his sons jangled past on four camels with bells at their knees.

音放出動詞に対して、(5)に示す光の放出を表す光放出動詞は、移動動詞としては容認度がかなり下がる。なお、物質の放出を表す物質放出動詞は、(6)のように移動動詞として問題なく用いられる。

(5) a. ??The burning car blazed across the field.

b. ??A shooting star flashed across the sky.

(6) a. Water gushed through the streets.

b. Oil gushed from the well.

本稿では、(2)にある音放出動詞が移動動詞として容認され、(3)にある音声を発する動詞が移動動詞とし

て容認されない理由と、光放出動詞の移動動詞としての容認度が落ちる理由を、生成語彙論(Generative Lexicon)で提案されている特質構造を検討することで明らかにする。そして、音放出動詞の特質構造の特性と「行為の連鎖」に則した原理でこの動詞クラスの移動動詞としての解釈が許されることを示す。

第Ⅱ章で、音放出動詞、光放出動詞の意味表示を確認し、第Ⅲ章で意志性(volitionality)や外的・内的使役(external/internal causation)といった概念だけでは、上で見た動詞クラスの移動動詞用法の可能性を捉えることができず、さらに詳細な意味特性あるいは意味表示に注目する必要があることを示す。第Ⅳ章で移動動詞として用いることができない動詞クラスの意味表示から、移動動詞の解釈を認められない理由を明らかにする。第Ⅴ章では、第Ⅳ章で示した移動動詞の解釈を得るのに必要な条件が音放出動詞はそろっていることを示すとともに、光放出動詞が移動の解釈を持ってないことも同じ条件で説明されることを論じる。第Ⅵ章で議論をまとめるとともに、本議論の理論的な意義に触れる。

Ⅱ. 放出動詞の語彙表示

本章では、主に音放出動詞を例にとって、その語彙表示を確認する。丸田(1998:132)⁵⁾は放出動詞の語彙概念構造を次のように提案している。

(7) *flash*

[y OPERATE] CAUSE [BECOME [FLASH IN-EXISTENCE]]

ここではある物体(y)が活動することによって、光(FLASH)が存在するようになることが示されている。

放出動詞は様々な構文に用いられるが、その中に場所格交替構文と場所格倒置構文がある。前者の例を(8)、(9)に、後者の例を(10)に示す(本稿では、場所前置詞句が現れる(8a)を場所型、with前置詞句が現れる(8b)をwith型と呼ぶ)。

- (8) a. Flies buzzed in the bottle. (場所型)
b. The bottle buzzed with flies. (with型)

- (9) a. The stars flashed in the sky.
b. The sky flashed with stars.

- (10) a. In the hallway ticked a grandfather clock.
b. On the crown sparkled a lot of jewels.

Kageyama(1997)⁶⁾は自動詞型の場所格交替を示す動詞の語彙概念構造として次の意味表示を提案している。(11a)は場所型に現れる際の意味表示で、(11b)はwith型に現れる場合のものである。

- (11) a. 場所型: [y BE-AT z]
b. with型: [z BE-WITH [y BE-AT z]]

(11a)はある物体(y)がある場所(z)に存在することを表し、(11b)はある場所(z)がある物体がその場所に存在しているという状態を持っていることを表している。

丸田(1998)やKageyama(1997)の提案を基に、磯野(2003)⁷⁾、Isono(2008)⁸⁾では、放出動詞が場所格倒置構文に現れることから、その意味表示は、放出される音や光とともにそれを放出する物体の存在をも表していると考え、次のような意味表示を提案した(詳細な議論についてはIsono(2003)及びIsono(2008)を参照)。

(12) *buzz*

$$\left(\begin{array}{l} \text{event structure} = \left(\begin{array}{l} e1^P \text{ o}_{\text{cc}} e2^S \\ S-E2 = e2 = e3^S \text{ or } e4^S \\ \text{head: underspecified} \end{array} \right) \\ \text{argument structure} = \left(\begin{array}{l} \text{ARG1} = x \\ \text{ARG2} = y \end{array} \right) \\ \text{qualia structure} = \left(\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{act}(e1, z) \\ z = x \text{ or } y \\ \text{at}(e3, \text{BUZZ}\&x, y) \\ \text{with}(e4, y, \text{BUZZ}\&x) \end{array} \right) \end{array} \right)$$

(x: entity, y: location, BUZZ: emitted sound)

この意味表示で、事象1は過程事象であり、この動詞が進行形で用いられることを可能にする。事象3は音を出す物体(x)と出されたBUZZという音がある場所(y)に存在することを表し、事象4はある場所(y)が音を出す物体(x)とBUZZという音を有していることを表している。また、各事象の時間関係は、重複関係(overlapping)である。(12)で、音を放出する物体がzに現れるときは、事象3が活性化されて場所格交替構文の前置詞型や場所格倒置構文の意味表示となり、物体が存在する場所がzに現れるときは事象4が活性化されて場所格交替構文のwith型の意味表示となる。

Ⅲ. 動詞の意味的特徴 —意志性と外的・内的使役—

本章では、放出動詞、動物音声動詞や発話様態動詞の意味的特徴に関して、意志性や外的・内的使役と移動動詞用法との関係をまとめる。そして、これらの意味特徴だけでは、動詞が移動動詞としての解釈を持ちうるかどうかを区別できないことを示す。

まず放出動詞について考えてみよう。Levin and Rappaport Hovav (1995)は、(13a)の放出動詞の自動詞用法は内的使役の意味特徴を持つとし、移動動詞として用いられる(13b)はこのタイプからの派生であると考えている(さらに、それを使役化したものが(13c))。これに対して、(14)の他動詞用法は外的使役の意味特徴をもつと考えている。

(13) a. We heard the windows rattle at every gust of wind. (internally caused verb (unergative))

b. The car rattled down the cobbled road. (unaccusative)

c. Slowly, they rumbled the Big Wheel across the sidewalk ...

(14) a. The postman buzzed the doorbell. (externally caused verb)

b.*The postman buzzed the bees.

意志性に関しては、(15a)の「笛を吹く」のように意志性をもつと考えられる場合には(15b)で移動動詞用法は容認されず、(16a)のように主體的には音を発しない場合のみに(16b)にあるとおり移動動詞用法が許される。このことから、放出動詞の移動動詞用法では意志性はないと考えることができる (Folli and Harley (2008)⁹⁾ も参照)。

- (15) a. Shelly whistled.
 b. *Shelly whistled down the street.

- (16) a. *The bullet whistled.
 b. The bullet whistled through the air.

次に、動物音声動詞や発話様態動詞、及び身体関与動詞(verbs involving the body)について考えてみよう。それぞれの動詞クラスに属する動詞の例は次の通りである (いずれもLevin(1993)より)。

- (17) a. 動物音声動詞: bark, caw, chatter, coo, croak, hiss, mew, quack, yell ...
 b. 発話様態動詞: call, chant, chatter, cry, groan, grumble, moan, murmur, rage, scream, shout, whimper, whisper, yell ...
 c. 身体関与動詞: belch, burp, cough, gape, giggle, sneeze, snore, yawn ...

この3つのクラスの動詞は移動動詞用法をもたない ((18a)は動物音声動詞, (18b)は発話様態動詞, (18c, d)は身体関与動詞の例)。

- (18) a. *The duck quacked down the path.
 b. *He yelled down the street.
 c. *Paul coughed to the classroom.
 d. *Teresa sneezed across the street.

また、これらの動詞は(19)~(21)にあるように場所格倒置も不可能である。したがって、これらの動詞は主語名詞句として現れる物体の存在そのものは意味しておらず、それに対応する事象を意味表示にもっていない。この点で、音や光を放出する物体の存在をも表す放出動詞とは異なっている。

(19) 動物音声動詞

- a.*Outside barked the dog.
 b.*Outside cooed the pigeon.

(20) 発話様態動詞

- a.*In the room whispered a secret agent.
 b.*Into Mary's ear hissed Julie.

(21) 身体関与動詞

*In the classroom coughed Paul.

coughを例にとると、その意味表示は次のようなものであると考えられる。

(22) *cough*

$$\left[\begin{array}{l} \text{event structure} = \left[\begin{array}{l} e1^P \\ \text{head: } e1 \end{array} \right] \\ \text{qualia structure} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{act}(e1, x) \\ \text{TELIC} = \text{at}(e2, \text{COUGH}, y) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(x: PAUL, y: world)

この意味表示では、事象1が咳をするという活動を表し、また目的役割にその結果として生じる咳の音の存在が表されている。しかし、咳をする物体 ((18c)ではPaul) の存在を表す事象は意味表示には含まれてい

ない。動物音声動詞や発話様態動詞の意味表示もcoughとほぼ同じ意味表示をもっていると考える。

ここで見た3つのクラスの動詞と放出動詞の移動動詞用法の可能性、意志性、内的使役の有無をまとめると次のようになる。

(23)

| | 移動動詞用法 | 意志性 | 内的使役 |
|------------------|--------|-----|------|
| 放出動詞 | yes | no | yes |
| 動物音声動詞 発話様態動詞 | no | yes | yes |
| 身体関与動詞 | no | no | yes |

身体関与動詞は、放出動詞と同じように意志性を持たないが移動動詞用法は認められない。内的使役については、すべてのクラスが有しているが移動動詞用法が認められるのは放出動詞のみである。このように意志性と内的使役のみでは、ある動詞が移動動詞としての解釈をもつかどうかを切り分けることができない。このことから、さらに別の角度から意味表示を考える必要があることがわかる。

IV. 移動と意味表示

本章では、基本的な移動動詞の意味構造を確認した上で、移動動詞用法をもたない動物音声動詞や発話様態動詞、及び身体関与動詞の意味表示からこれらの動詞が移動の解釈を受けられないことが自然に説明されることを示す。

(24)にあるような移動動詞(verbs of motion)はそれのみで移動を表すとともに、方向を表す前置詞句と共に起する。動詞runと前置詞toの意味表示はそれぞれ(25)、(26)で、runの事象1(act, 移動しようとする活動)と事象2 (move, 事象1の活動によって引き起こされる移動)、そして、toの事象1 (move, toが本来的に表す移動)が時間的に重複していることで、走るという活動とそれによって引き起こされる移動、そしてtoが表す移動と、最終的な着点が意味表示で表される。runとtoがもつそれぞれの移動の事象が合成され、このような意味レベルでの操作は共合成(co-composition)と呼ばれている。

(24) Doug ran to the station.

(25) run

$$\left[\begin{array}{l} \text{event structure} = \left[e1^P o_{\infty} e2^P \right] \\ \text{qualia structure} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{act}(e1, x) \\ \text{move}(e2, x) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(26) to

$$\left[\begin{array}{l} \text{event structure} = \left[e1^P <_{\infty} e2^S \right] \\ \text{qualia structure} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{move}(e1, v) \\ \text{at}(e2, v, w) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

coughの意味表示を考える前に、発話に関わる動詞について考えてみよう。(27)-(28)のspeakの意味表示では、ある内容を発話するという行為が事象1で表され、発話された内容が存在するということが事象2で

表される。このspeakがtoと用いられるときに、speakの活動とtoの移動の合成によって、Johnが移動していくという意味表示が作られることはない。それは、ある発話をしようという活動と移動とは意味的に整合しないからである。上のrun toの場合に、runが表す活動（とそれに引き起こされる移動）が移動と直接関連するものであることとは異なっている。このことは、「ある活動とそれによって引き起こされる移動や変化が一貫したものでなければならない」という事象間の一連の意味的なつながりが重要であると考え「行為の連鎖」(action chain)¹⁰⁻¹²⁾として知られている。また、この考え方から、次のような「事象の特定性制約」を導き出すことができる。

事象の特定性制約

「ある活動を表す事象は1つの事柄のみに特定の働く」

この制約により、runが走ろうとして身体を動かす活動を表している場合には「偶然出会う」といった意味は表せず、speakが言葉や命題内容を発しようとする活動を表す場合には「話しながら移動する」という意味は表せないことが意味表示のレベルで自然に説明される。

(27) John spoke to the audience.

(28) *speak*

$$\left[\begin{array}{l} \text{event structure} = \left[\begin{array}{l} e1^P \\ \text{head: } e1 \end{array} \right] \\ \text{qualia structure} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{act}(e1, x) \\ \text{TELIC} = \text{at}(e2, \text{SPOKEN CONTENT}, y) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(x: x, y: world)

(28)のspeakの意味表示と(26)のtoの意味表示からは、主語(x)が移動していく移動動詞の解釈よりも、むしろxがある活動をした結果、ある事柄が話されてそれが存在するようになり、その話された内容が聞き手のところに移動していく、という意味表示ができあがる。それを概略的に示すと次のようになる。そして、(27)の実際の意味解釈もこの通りである。

(29) $\text{act}(e1, \text{john}) \Rightarrow$

$\text{at}(e2, \text{SPOKEN CONTENT}, \text{world}) \& \text{move}(e3, \text{SPOKEN CONTENT}) \Rightarrow$

$\text{at}(e4, \text{SPOKEN CONTENT}, \text{audience})$

では、身体関与動詞の1つである(22)にあるcoughに戻って((30)に再掲)その意味表示と移動動詞用法が認められないこととの関係を見てみよう。coughの意味表示は(22)で見たとおりで、これは、speakの意味表示とほぼ同一であり、異なるのはcoughでは目的役割が $\text{at}(e2, \text{COUGH}, y)$ (咳がyに存在している)となっている点である。この意味表示においても、事象1が表す活動は移動とは何の関係もなく、咳を生み出すための活動である。そのため、toがあるとしても移動の意味は生まれない。この場合も、coughとtoの意味表示を組み合わせると、speakの場合と同じように、ある活動の結果として咳が生じ、その咳が移動して教室の方に行く、という意味表示になる。実際に(30)を解釈しようとするとそのような解釈しか得られない。

(30) *Paul coughed to the classroom. (=18c)

(31) act(e1, paul) =>

at(e2, COUGH, world)&move(e1, COUGH) =>

at(e2, COUGH, the classroom)

このように、ある活動とそれによって引き起こされる移動や変化が一貫したものでなければならないという「行為の連鎖」の概念から導き出される、「ある活動を表す事象は1つの事柄のみに特定の働く」という考え方に基づけば、speakや身体関与動詞の1つであるcoughがたとえ方向を表す前置詞句とともに用いられても移動動詞としての解釈がえられないことは、意味表示から自然に説明される。前節で見た移動動詞用法をもたない動物音声動詞や発話様態動詞についても同じ説明が当てはまる。

V. 放出動詞の移動動詞用法

本章では、音放出動詞を中心にその移動動詞用法と動詞・前置詞の意味表示の関係について検討し、この動詞クラスが移動動詞用法の解釈を受けることが意味表示から導き出されることを示す。音放出動詞に属する動詞whistleは、移動動詞の解釈を受ける際には、音を発するために行われる活動そのものは表していないと考えられる。それは、次の文の容認性によって示される。

(32) a. Shelly whistled.

b.*The bullet whistled.

(33) a.*Shelly whistled to the classroom.

b. The bullet whistled to the boat.

whistleは(32a)のように「笛を吹く」という意味を表すことがあるが、この意味を表すのは、その主語名詞句に笛を吹く活動をすることができるものが現れたときであり、その活動をできない弾丸が主語に用いられた場合には、(32b)のようにその意味で用いることができない。これに対して、方向前置詞句と用いられて移動動詞の解釈を受けるのは、(33b)のように自から音を出すことができない弾丸が主語として用いられた場合で、この場合はwhistleは「ピューと音をたてて移動する」という意味で解釈される。興味深いことに、自から活動して音を出すことができるものが主語として現れたときには、方向前置詞句と用いられると(33a)のように容認されない。このような観察から、whistleは、自から活動して音を出すものが主語として現れた場合に、つまり、「ある活動をして音を出す」という意味を表すときは移動動詞としては用いることができないといえる。

では、whistleの意味表示を基に、移動動詞用法が認められない(33a)の意味表示を考えてみよう。whistleの意味表示は、第2節で見た同じ音放出動詞のbuzzとほぼ同一で、発せられる音が異なるのみであると考えられる。ここでは、議論に関係する部分のみを示す。音放出動詞の特徴として、(34)は事象1が音を発しようとする活動、事象2が発せられる音(WHISTLE)と音を発する物体(Shelly)の存在を表している。

(34) *whistle*

$$\left[\begin{array}{l} \text{event structure} = \left[e1^P \ o_{\alpha} \ e2^S \right] \\ \text{argument structure} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG1} = x \\ \text{ARG2} = y \end{array} \right] \\ \text{qualia structure} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{act}(e1, \text{shelly}) \\ \text{at}(e2, \text{WHISTLE\&shelly, world}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

このwhistleが(33a)のように方向前置詞句toと用いられる場合、移動動詞の意味表示は合成されない。それは、前節で見たspeakやcoughの場合と同じように、whistleの事象1は移動とは関係のない活動だからである。これを概略的に示すと次のようになる。ここでは、下線の部分が意味的に整合しないので、このような意味表示は合成されず、したがって移動動詞の解釈は生じない。

(35) *act(e1, shelly)

=> at(e2, WHISTLE&shelly, world)&move(e3, WHISTLE&shelly)

=> at(e2, WHISTLE&shelly, the classroom)

では、移動動詞として解釈される(33b)の意味表示を考えてみよう。bulletが主語として用いられる場合、弾丸はそれ自身では音を発するような活動はできないので、whistleの事象1は満たされず、意味的に活性化しないため、(32b)は容認されない。しかし、(33b)のように方向前置詞句とともに用いられると、その意味表示は概略次のようになる。

(36) at(e2, WHISTLE&bullet, world)&move(e3, WHISTLE&bullet)

=> at(e2, WHISTLE&bullet, the classroom)

ここでは、弾丸とピューという音が存在し、それが教室の方に移動する、ということのみが示され、移動とは何の関係も持たない活動(act)は示されておらず、意味的な整合性が保たれている。したがって、この意味表示は問題なく合成され、放出動詞の移動動詞としての解釈が生じるのである。

ここで重要なのは、(32b)や(33b)のようにthe bullet(弾丸)が主語として用いられたときには、(34)にあるwhistleの事象1が不活性化になることである。このために、(32b)は動詞の意味表示が満たされずに不自然と判断され、これに対して、(33b)は前置詞の意味表示と共合成されることで移動の解釈が生じて自然な文として判断されるのである。(34)の事象1の活性化・不活性化に関連して、光放出動詞の例を考えてみよう。

本稿の最初に見たように、音放出動詞に対して光放出動詞は移動動詞として用いられる場合、その容認度が落ちる。

(37) ??The burning car blazed to the station.

光放出動詞は、音放出動詞と異なって、意図性をもたないものが主語に用いられても容認される。

(38) A car blazed.

このことから、(37)の場合でも光を出すための活動を表す事象は意味的に活性化したままであるといえる。このことから、(37)の意味表示を概略的に示すと次のようになる。ここでは、移動と関係のない活動が事象1として表示されており、この事象と移動の事象(事象3)は意味的に整合しないため、この意味表示は合成されず、そのため、移動動詞としての解釈はえられない。

(39) ??act(e1, burning car)

=> at(e2, BLAZE&burning car, world)&move(e3, BLAZE&burning car)

=> at(e4, BLAZE&burning car, the station)

しかし、興味深いことに次の文は移動動詞の解釈として問題なく容認される。

(40) A Japanese space probe named Hayabusa blazed through the sky.

日本の無人探査宇宙船であるはやぶさはそれ自身では燃えるわけではなく、大気圏に突入することで燃え出して光を放った。そのため、この文の意味表示では、燃えて光を発するための活動を表す事象 ((39)の act(e1, burning car)) は活性化されない。したがって、(33b) (その意味表示は(36)) と同じように意味的に整合しているため移動の意味表示が合成され、移動動詞としての解釈が容認されるのである。この例は、本章における放出動詞の移動動詞としての解釈に関する説明を支持するものである。

本章では、前章で立てた事象の特定性制約「動詞が表す活動は1つの特定の事柄のみに関わる」と、音放出動詞の音とそれを発する物体の存在を表す意味表示とから、自然に音放出動詞の移動動詞の解釈が導き出されることを示した。

VI. 結論

本稿では、音放出動詞の移動動詞用法が容認されることと、同じように音を発するにも関わらず動物音声動詞、発話様態動詞、身体関与動詞の移動動詞用法が許されないことが、第2章で確認した放出動詞の意味表示と、動詞が表す活動は1つの特定の事柄のみに関与できるという行為の連鎖の考え方に則した制約とから、意味表示のレベルで説明されることを示した。

移動動詞は、動詞の項として示される物体が移動していくことを示すもので、項に関わるという点で動詞が表す事象そのものと直接的に関わるものである。したがって、動詞と方向前置詞句が組み合わせられて意味表示の合成が行われる場合にも、行為の連鎖という条件が課されて意味のレベルで原則に則って行われる必要がある。これに対して、Paul coughed to the classroom.の「ポールは教室に向かって咳をした。」という解釈では、項として現れる物体の移動は関与しておらず、動詞の目的役割に示されるCOUGH (咳の音、あるいは咳そのもの) が関与している。主体役割や形式役割に表示される、語に内在的な意味とは異なり、目的役割に表示される意味内容は、基本的には世界知識に基づく語用論的な知識である。例えば、上記の文の動詞と動詞句の完結性について考えてみても、Paul coughed for/*in 5 minutes.と前置詞句を付け加えたPaul coughed to the classroom for/*in 5 minutes.とでは、完結性に変化はない。純粋な移動動詞の場合は完結性に変化が生じる(Paul ran for/*in 5minutes.とPaul ran to the classroom in/*for 5 minutes.). この点で、本稿でとりあげた各動詞クラスの移動動詞用法の有無の違いは、動詞の特質構造のそれぞれの役割にどのような情報が載せられているかをより分ける際の根拠を示しているとともに、特質構造中の形式役割と目的役割の共合成の違いを示すものと考えることができる。

謝辞

本稿は第14回Morphology and Lexicon Forumのワークショップで発表したものを改訂したものである。その際にご意見をくださった方々、東京のレキシコン研究会、大阪の関西レキシコンプロジェクトのそれぞれの例会で貴重なコメントをくださった方々にお礼を申し上げます。また、Heigi Harley氏、Bryan Meadows氏にはたびたび文法性の判断に協力していただき、同時に有益なコメントもいただいたことに深

く感謝する。なお、本稿における不備はすべて筆者の責任である。本研究は、科学研究費補助金（基盤研究(C)課題番号21520519, 平成21年度～平成23年度）の助成を受けている。

文献

- 1) Levin B (1993) English verb classes and alternations: a preliminary investigation, Chicago University Press, Chicago.
- 2) British National Corpus. <http://www.natcorp.ox.ac.uk/>.
- 3) Levin B, Hovav MR. (1995) Unaccusativity: at the syntax-lexical semantics interface, MIT Press, Cambridge, Mass.
- 4) 影山 太郎 (2006) 音放出動詞を伴う移動構文と結果構文. 英米文学. 関西学院大学. 57-73.
- 5) 丸田 忠雄 (1998) 使役動詞のアナトミー — 一語彙的使役動詞の語彙概念構造 —, 松柏社, 東京.
- 6) Kageyama T. (1997) The syntax and semantics of Spray/Load verbs. Verb semantics and syntactic structure. Kurosio, Tokyo. 97-114.
- 7) 磯野 達也 (2003) 自動詞型場所格交替. 言語情報科学, 東京大学. 17-33.
- 8) Isono T. (2008) Polysemy and compositionality in generative lexicon: deriving variable behaviors of motion verbs in relation to prepositions. Doctoral dissertation, University of Tokyo.
- 9) Folli R, Harley H. (2008) Teleology and animacy in external arguments. *Lingua*.118(2), 190-202.
- 10) Croft William A. (1990) Categories and relations in syntax: the cognitive organization of information. University of Chicago Press, Chicago.
- 11) Langacker RW. (1991) Foundations of cognitive grammar vol. II: descriptive application. Stanford University Press, Stanford.
- 12) 影山 太郎 (2001) 動詞の意味と構文, 大修館書店, 東京.

(平成23年11月30日稿)

査読終了年月日 平成23年12月26日